



# アハバ-ル・カシオン



JICA シリア事務所  
2009年10月1日  
第227号

## ★★ 10月・11月の予定 ★★

### 【行事予定】

10月14日 21-2次隊歓迎会  
10月15日 ボランティア活動報告会  
11月12日 日本語スピーチコンテスト(ダマスカス大学)

### 【専門家・ボランティアの動き】

#### <離任>

#### JV

10月13日 19-2次隊  
・村木裕俊(果樹、農業農地改革省)

#### <着任>

9月24日 高橋早苗(経理)  
9月27日 内田謙一(フィールド調整員)  
10月2日 清水浩二(下水道プロジェクト)

### 【事業の動き】

10月3日-30日 太陽光パネルを活用した街灯システム導入計画 第二次現地調査  
10月24日-28日 第二次地方都市廃棄物処理機材整備計画基本設計説明調査  
11月中旬 水資源情報センター設立計画フェーズ2

#### <休暇>

10月6日-11月4日 富田明子所長(健康管理休暇)  
10月9日-11月6日 都築まさ子ボランティア調整員(健康管理休暇)  
11月4日-11月30日 藤木明代ボランティア調整員(健康管理休暇)

シリアでの2年間はあっという間だった。わくわくして関空を駆け、ドバイでの乗り継ぎを経て、ちょっと不安な気持ちでダマスカス国際空港に降り立ったのが2年前。語学もフスハ(文語)とアンミーエ(口語)の違いに戸惑いつつも、初日から「順応しよう」と先輩隊員と行ったレストランで生水を飲んだのが懐かしい。

シリアでの暮らしは「めっちゃ

### ● 離任のご挨拶

## シリア・アラブ共和国に暮らして

19-1 UNRWA 体育 小林 洋太

楽しかった！」の一言に尽きる。もちろん楽しいことばかりではなかったが、今となっては全てがセピア色の楽しかった思い出である。何故「めっちゃ楽しかった！」のか？この原稿を書くことで私が見たシリア・アラブ共和国(?!)を想像してもらえたら少しは伝わるのではないかと思う。

シリアには実に多くの人々が住んでいる。ここで多くの人々とするのは、現在「国」というものを持っていない人々もこの地で暮らしているからである。シリアの基をなすシリア人という人々がいる。彼らは白人系であったり、遊牧民系であったり、外見だけで判断するのは実に難しい。それに加えて、パレスチナ、クルド、イラク、アルメニア、トルクマンなど日本に居れば、その名称すら聞くことのない人々も多く住んでいる。そしてこの地に住む人の多くは、人懐っこく、優しく、繊細で、それでいて豪快な一面もあり、しつこかったり、単純かと思いきや複雑 だったり、簡単な表現で済ませば「実に人間味に溢れている人たち」である。



古よりユダヤ教、キリスト教、イスラム教がこの地で生まれ、エジプト 文明、チグリスユーフラ

テス文明の狭間に在り、紀元前のエジプト王朝の頃よりラムセス2世がカルシュの戦いを演じ、この地にパルミラ王朝が生まれ滅び、ローマ時代にはローマ帝国の統治下に置かれ、イスラム教が生まれた時代にも争いが在り、十字軍の遠征があり、モンゴル帝国のとの争い、オスマントルコ帝国の支配を経て、西欧の植民地になり、現在に至るまで実に数多くの争いが起こった。そしてその何千年の歴史の中でこの土地は、文化、宗教、人種が混ざり合い、それらが共存と競争を繰り返しながら今のシリア・アラブ共和国に辿り着いたわけである。それだけ多くの因子が複雑に絡まり合い成立したこの国には、歴史の証人である遺跡が数多く存在し、先にあげたような人々が生活し、モザイク的な風俗が形成され、それぞれの文化を誇りに生活している人間味あふれる人たちが、イスラム教国家としてのシリア・アラブ共和国に暮らしている。

この地に住む多くの人たちはイスラム教徒であり、イスラム教徒は唯一神を信仰し、偶像崇拜は禁止されており、また飲酒は禁止されている。しかし、一般に知られては居ないが宗派によっては過去の偉大な人を信仰の対象とする人も居れば、飲酒をする人たちも居るし、義務とされているメッカへの巡礼を行わない人たちも居る。それだけでも、義務教育で習った自分の知識はぶっとんでしまった。全く目から鱗である。

さらに先に述べたように、実に多くの遺跡が在り、それらは教科書に載っている写真ではなく実態が在り、歴史がある。(円形劇場で知られている)世界遺産のボストラは、ローマ時代に成り立ち、その後イスラム軍への要塞へと作り替えられ、さらにその後十字軍への要塞へと移転されたという。時間の経過とともに増改築が繰り返され、現在に至るといふわけである。これも全く日本の義務教育では知る機会に恵まれなかった。さらに目から鱗である。そして私が一番関わってきた「パレスチナ難民」と呼ばれる人々、恥ずかしい話ではあるが日本に居る時の認識としては、イスラエル建国時に祖国を追われた難民という程度だった。イスラエル建国がいつかも知らず、どういった経緯でそのようになったかも知らなかったのである。そしてさらに恥を上塗りすると、ほんの少しメディアを通して見たアフガン難民の様子にテントでの生活をしているとも思っていた。しかし、実際にこの地に立ち難民キャンプ地に赴いてみるとシリアの街とさほど変わらぬ暮らしをしていて驚き、祖国を追われた経緯を聞き心を痛め、自分の世界観を改めることになった。また、彼らと時間を共にし、家に招かれて家庭料理に舌鼓したり、彼らの日本観を伺うことがあったり、宗教の話をしたり、政治の話もしたり、文化交流と呼ぶに値するかはわからないが多くの話をした。このことは私のシリア観、アラブ観、イスラム観を構築するのに一役も二役もかってくれた。このように、ここで暮らす人たちとの何気ない交流や、活動の合間や休みを利用して行った遺跡巡り、活動後のパレスチナ人宅訪問では、毎回何か新しいことが発見でき、2年間で何度驚き、何度目から鱗したことがわからないくらいに、実体験を基にした新しい知識を増やすこと

ができたことは、個人的には凄く嬉しく、充実していたと思える。



そして日々の活動では(2年間という限られた時間ではあったが)、それなりの結果は残せたと思っている。当初の目標は、一人の「先生」になり帰ることだった。私が中学生の頃、学校に来た一人のALTのオーストラリア人が居たが、やはりどこか「ゲスト」として見ていた。もちろん彼らは英語の勉強に一役買うことが目的として来ていたので、楽しい授業運びを行ったり、手伝ったりするのが彼らの仕事だったのだと思う。しかし、私は主役ではないとしても、一人の先生として赴任したと自負していた。当然のことだが、語学力は対象となる子供達より劣り、シリアの、強いてはUNRWAの体育というものを知らないの初めから一人の先生として活動することは困難だが、最終的に子供達から「体育の先生」として見てもらいたいと思っていたわけである。活動が始まり、日本人慣れしている私の任地のムードは暖かかった。しかし語学がわからないのはやはり致命的であり、授業の前の準備運動を行う程度で、あくまでゲストであった。その後は時間の経過とともに、日々の授業で笑ったり、悔しい想いをしたり、楽しかったり、理不尽な想いをしたり、嬉しい出来事が会ったりしたわけだが、全てが過ぎた今となっては(こんな言葉でまとめたくはないが)どれも良い思い出となっている。なかでも心に残っている場面がある。残念ながら体育の授業中ではないのだが、CP(カウンターパート)の時間割の都合で美術の時間に私一

人で教室に居たのだが、当然CPが居なくなると子供達は騒がしくなる。私は最初は子供達が自粛するのを待っていたが結局そのままの状態が続いたので、席を立ち子供を捕まえお灸を据え事態の收拾を図り、その後に「オレはお前らの友達でもあるが、先生でもある。学校の外では友達だが、学校の中では先生だ」と全員に届くような大きな声で言ったところ、子供達は「そうだな、(遊んでいた子供達に向かい)お前達が悪い、先生の言う通りだ」と自主的に教室が静かな状態に戻り、それ以降、そのクラスでは例え、私一人でも授業を運営できるようになった。



日本の学校を想像すれば、当然の風景であるが、先ほどのALTの先生が一人で教え、日本語で言った場面を想像すると少しは、このことをリアルに想像できるのではないかと思う。もちろん現実はその以上のものであるのだが・・・(笑)。他にも、クラブ活動をしていたときに生徒同士の会話を聞いたことや、CPと調整員の田口FCとのやりとりを耳にしたとき、たくさん心が残っている。もちろん活動の期間内に悩みもしたが、ともあれ、この2年間の活動(仕事)もプライベートも常に新しい発見に満ちあふれていたし、シリアでUNRWA体育として活動できたことは非常に自分の経験になったと感じている。最後になるが、隊員活動を円滑に進める為に尽力して頂いた田口FCを初め、在シリアJICA事務所の職員の方々、強いては赴任当初から暖かく、心強い言葉をかけてくれたナショナルスタッフ、そして隊員の皆様に

この場を借りて「ありがとう」と謝辞を述べたい。



2008 年は、パレスチナ難民が発生してから、60 年になります。1948 年の第一次中東戦争の影響を受けて、最初のパレスチナ難民が発生しました。60 年もの長い間、難民として生活するのは一体どういうことなのでしょう。今回は、新たなパレスチナ難民支援の試みを紹介します。

国連の機関として、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA、「ウンルワ」と読みます)が、教育、医療、社会サービス、緊急支援などをパレスチナ難民に提供しています。難民支援といえば、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)がありますが、UNHCR が世界中の難民に対する支援を提供しているのに対し、UNRWA はシリア、レバノン、ヨルダン、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区に住むパレスチナ難民という特定のグループへの支援を提供している点に違いがあります。

シリアには 9 つの難民キャンプがあり、約 44 万人のパレスチナ難民が住んでいます。難民キャンプといっても、よくテレビに出てくるような空き地にテントを張って避難しているようなキャンプではありません。何しろ、すでに 60 年も経っているのですから、外観はコンクリートの建物で、周囲の町並みと大差ありません。しかし、キャンプ内の生活環境はひどく、とても狭い家に住んでいます。

シリアでは、アレッポ近郊のネイラブキャンプの状況が特にひどいと言われています。このキャ

## ● 活動報告

### 新たなパレスチナ難民支援

シリア事務所員 日比野

ンプは、そもそも第二次世界大戦の時に軍が使っていたバラック(掘っ立て小屋)に 3,000 人のパレスチナ難民が住み始めました。当時は、10-15 m<sup>2</sup>のスペースに 10 人位が住んでおり、家というよりはシェルター(一時避難場所)のようなものです。年月が経ち、現在は 20,000 人の難民が住んでいますが、居住環境は依然として劣悪なままです。



このような状況を重くみて、UNRWA がキャンプの再建プロジェクトを始めました。そのプロジェクトに、2008 年 3 月に日本の無償資金協力で 3 億 8,900 万円(アラブ首長国連邦が 4 億 8,000 万円、アメリカが 1 億 5,000 万円拠出)の支援実施が決まり、学校建設、住居建設、コミュニティーセンターの整備、難民のいろいろな研修活動を支援することになりました。

実は、難民の生活環境を改善は、単純に人道的な観点からだけでは語れません。「難民」は移民と違い、「一時的に避難している人々」であり、やがては本国に帰るといふ扱いの人々です。そのため、避難先にとどまることは、避難先の国(シリア)にしてみれば嬉しいことではありません。そして、避難してきている人の生活環境を改善してしまうと、そこに長く滞在することを許すことにもなりかねません。また、パレスチナ問題は、アラブ対イスラエルという構図もあり、シリアにいるパレスチナ難民の定住化を促進し

ているかのような印象を国際社会に与えると、それをイスラエルに利用(シリアは、パレスチナ難民の本国帰還を望んでいないと言われる)される危険もあります。



このような理由から、長年、難民の生活環境改善は積極的に行なわれてきませんでした。しかし、パレスチナ難民の場合は、事情が違います。中東和平は、一向に進展せず、彼らがパレスチナに帰れる見通しも立っていません。そのような中、狭いトタン屋根の家に 60 年間も住み続けているのです。

そこで、シリア政府は、難民が本国に帰る権利(帰還権)と現在の生活環境の問題を切り離して考え、「やがては帰還する人々だけでも、現在の劣悪な生活環境を改善する必要がある」という方針の下、このプロジェクトの開始を許可しました。これは、人道的な観点から、シリア政府としては大きな決断だったと評価されています。



JICA はパレスチナ難民支援のために長年、専門家やボランティアを派遣、支援してきました。今後は、ネイラブプロジェクトにも青年海外協力隊員を派遣して、難民の自立を促す住民委員会の強化や青少年育成活動、女性の社会参画促進を支援していきます。

● 離任と着任のご挨拶

シユクラン！ そして、アハラン・ワ・サハラン！

	<p>名前：村上真由美 職種：職員（環境・農業・経理担当）</p>	<p>「世界の人々が広く永くご飯を食べられるように」と志した乾燥地農業&amp;国際協力分野でしたので、シリアでの日々はまさに夢の現場でした。力及ばず、やりきれなかった事も多くありますが、喜怒哀楽の日々をご一緒下さったみなさん、これまでシリアで活躍され信頼や人間関係を構築して下さいました。本当にありがとうございました。シリアという国や、シリアで繋がったご縁に感謝！</p>
	<p>名前：木下由佳 職種：JV・理学療養士</p>	<p>2年間、たくさんの方にお世話になりました。みなさんまた会う日までお元気で。</p>
	<p>名前：高瀬義彦 職種：SV・PLCインストラクター</p>	<p>趣味と仕事の一致する得意分野、電子制御の分野に集中して仕事をしたので良い実験結果を得るたびに年齢を超えてワクワク感を味わえた。大学のスタッフと JICA 関係の皆さんに感謝。シリアの方々は歴史と宗教にとけこんだ透徹した人生観を持つと感じた。世界の中で多様性を保つホモサピエンスにはまだ未来がある。</p>
	<p>名前：飯田 宏 職種：SV・ジャンダール電力研修所</p>	<p>指導・監督を務めましたジャンダール電力研修所での火力発電所の運転と保守に関するイラク人の第三国研修が終了しました。今年度は3カ年計画の TCTP の最終年度に当り 52 名の研修を行い、「概ね良好」との研修員の評価を得ました。今回の赴任では、1 年半前の前回に比べシリアにおける日本の知名度が低下して行くことに驚かされました。我国の製品の激減による親日家の減少を食い止めるには、ボランティアの活動の更なる拡大が必須と思います。また、これを支え鼓舞する事務所の気遣い、心配りも必要となるでしょう。ボランティアの皆様が事務所の支援を受けて十二分の活動成果を得られることをお祈りします。</p>
	<p>名前：須原靖博 職種：職員（環境・農業・経理担当）</p>	<p>6 月に着任しました職員の須原です。大学と大学院では街並み保全の勉強をしていました。ダマスカスやアレppoといった世界遺産の街並みがあるシリアでの生活が楽しみです。それ以外にも、素敵な街並みを見つけられましたら、情報共有して頂けると嬉しいです。</p>
	<p>名前：高橋早苗 職種：経理</p>	<p>前回個人で遊びに来て以来、2年ぶりにシリアに戻ってこられて幸せを感じています。モスクの近くに住居を構え、アザーンが目覚まし代わりです！経理という細かい仕事ではありますが、日々精一杯がんばってまいりたいと思っています。よろしくお祈りします。</p>
	<p>名前：内田謙一 職種：フィールド調整員</p>	<p>UNRWA 担当のフィールド調整員として着任いたしました内田謙一と申します。来年 2010 年 5 月末までの任期になります。皆さん、宜しくお願いいたします。</p>

WEB=[www.jica.go.jp/syria/index.html](http://www.jica.go.jp/syria/index.html)  
E-MAIL=[sr\\_oso\\_rep@jica.go.jp](mailto:sr_oso_rep@jica.go.jp)

お知らせ

本ニュースレター配信ご希望の方は当事務所まで氏名、メールアドレス、JICA との関係（所属）を連絡願います。

編集後記

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。イード休みも終わり、朝晩秋を感じる今日この頃です。(Y.I.)

